学 位 記 番 号：　修士第４７号

氏名（本籍）：　今　岡　万　里（京都府）

学 位 の 種 類：　修士（看護学）

学位授与年月日：　平成１６年３月２５日

学位論文題目：　重症集中ケア認定看護師の家族と患者の距離を縮める家族看護実践プロセス

別紙様式３

論　文　内　容　要　旨

※整理番号	48	(ふりがな) 氏　　名	いまおか　まり 今岡　万里
修士論文題目	重症集中ケア認定看護師の 家族と患者の距離を縮める家族看護実践プロセス		

はじめに

重症集中ケア領域における家族は患者と同様に多大な影響を受けながら、自分のことはさておき患者を最優先にしている。そのような家族をこれまで危機的状況と捉えた事例研究が多く、その中では危機理論や危機モデルを用いて家族看護を説明していたが、それらは家族看護を実践する上で必要な家族アセスメントや家族看護介入の指針を十分明らかにしていないのが現状であった。

目的

本研究では、重症集中ケア認定看護師（以下認定看護師とする）が実践している家族看護を明らかにすることを目的とした。それが明らかになることによって、家族看護の専門性の追究や看護の質の向上、看護師の教育に貢献すると考える。

方法

認定看護師 14 名に対して半構成的面接を実施し、質的データを得た。面接内容は研究参加者の承諾のもと録音し、逐語録に起こした後にコード化し、グラウンディド・セオリーアプローチの手法を用いて分析した。研究参加者の選定については、先行研究において、家族看護の実践能力は看護師の属性によって影響を受けることが明らかになっているが、実践能力を限定した研究はされてこなかったため、一定レベル以上の実践能力を養っている認定看護師を対象とした。

結果

逐語録に起こした面接内容を、認定看護師の家族看護実践に関して解釈できる 1054 個の最小単位に切片化しコード化を行い、継続比較をした。その結果、上位カテゴリ 7 個、中位カテゴリ 14 個、下位カテゴリ 31 個が抽出され、各カテゴリ間には相互の関係性や文脈が存在し、それは以下のように記述された。

認定看護師は、【家族は切羽つまっている】、【家族員はなりゆきを飲み込めない】という様子から、【家族と患者に距離が生まれる】と家族アセスメントをし、【家族の心強い支援者となる】、【家族員になりゆきを分かってもらう】家族看護介入から、【家族と患者の距離を縮める】家族看護介入に結び付けていた。その結果、【家族は患者を手元に取り戻す】という成果を確認した。

考察

本研究結果で明らかになった認定看護師の実践している家族看護とは、認定看護師が【家族と患者に距離が生まれる】ことをアセスメントし、【家族と患者の距離を縮める】家族看護介入によって、【家族は患者を手元に取り戻す】成果を得るまでのプロセスであった。

重症集中ケア領域において家族は、【家族は切羽つまっている】、【家族員はなりゆきを飲み込めない】、【家族と患者に距離が生まれる】で「文脈」を成し、それらの３つのカテゴリの内【家族と患者に距離が生まれる】は、家族アセスメントの「帰結」と考えられた。それに対して【家族の心強い支援者となる】、【家族員になりゆきを分かってもらう】、【家族と患者の距離を縮める】は家族看護介入の「文脈」を成し、先の３つのカテゴリの内【家族と患者の距離を縮める】は、家族看護介入の「帰結」であった。その成果として、【家族は患者を手元に取り戻す】が本研究結果の「帰結」となった。

重症集中ケア領域では、患者が生死をさまよっていることに加え、多くの医療機器に囲まれているため、容易に【家族と患者に距離が生まれる】。このような特殊な環境においては、家族員が普段の様子に戻り、患者に自ら近づけるようになり、【家族は患者を手元に取り戻す】ことが家族看護を進める上での第一歩であると考えられる。

総括

認定看護師の実践している家族看護とは、認定看護師が【家族と患者に距離が生まれる】という家族アセスメントに対し、【家族と患者の距離を縮める】家族看護介入によって、【家族は患者を手元に取り戻す】成果を得るまでの家族と患者の距離を縮めるプロセスであった。